灯 ともしび 5 May

時間よ急げ

草野　義輔

新型コロナウイルスの収束をひたすら待つ毎日だが、外出自粛もあり読書の時間は取れる。病原菌が絡んだSFやミステリーは古今数多くある。もう120年以上も昔の作品だが、私の好きな本にH・G・ウェルズが書いた「宇宙戦争」という世界的ベストセラーがある。1938（昭和13）年に米国でラジオ番組になり、宇宙人が攻めてきた、と臨時ニュース形式で放送。それを信じた人たちが荷物をまとめて避難し始める、という笑えない事件があった小説だ。

ご案内のように優れた兵器を持つ宇宙人が攻め込み人類は抵抗できず、あわや、というときなぜか宇宙人が自滅してしまう。人類を救ったのは地球上にあるウイルスで宇宙人は抗体を持っていなかった。ウイルスが地球を救ったという話。

一方、日本ではファンだった小松左京の「復活の日」が秀逸で、64（同39）年の発刊だがコロナ騒ぎで再び注目されているようだ。こちらは細菌兵器研究で作られたウイルスが南極を残して人類を滅亡させるストーリー。新型コロナも南極だけはいまだ未発症。

感染症と人類には闘いと共存の長い歴史があり、苦しみながらも人類は生き延びてきた。昔と比べれば医薬品開発は格段に進歩しているはず。年は取りたくないが、今はとにかく時間が早くたち、新型コロナ用のワクチンや新薬の開発が早期に実現することを願うばかりだ。時間よ急げ！

（昭和学園高校理事長・日田市）